

早稲田ラグビーの復活に関する歴史的研究～清宮体制を中心として～の研究

A historical study on the revitalization of WASEDA Rugby ~focusing on the Kiyomiya regime~

1K04B010-7

有田 幸平

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

はじめに

早稲田ラグビー部は1918年(大正7年)11月創設。日本選手権優勝3度、大学選手権優勝13度を誇りまた、今年で創部90年を誇る歴史と伝統あるクラブである。

日本代表も数多く輩出しており、この間行われた第7回フランスワールドカップでも4人の卒業生が選ばれている。またラグビー界だけではなく、政界や経済界にも数多くの人材を輩出している。

しかし、そのような名門クラブでも低迷する時期があった。私は早稲田ラグビー蹴球部に所属する者として、いかにして早稲田ラグビーは歴史と伝統あるクラブになったのか、また低迷していた時の原因は何だったのか？そしてまた、どのように早稲田ラグビーが復活していったのかについて研究した。

第一章 「早稲田ラグビー」の始まり

1, 早稲田ラグビー

早大ラグビー部は、1918年(大正7)11月7日に体育会加入が認められ正式に創設された。

1927年(昭和2)に行われた豪州遠征では5戦全敗という成績ではあったが、本場のスピーディなオープンプレーを体得し、帰国。その後1933年(昭和8)には、お家芸ともいわれる「ゆさぶり戦法」を完成。初の全国制覇を成し遂げた。」そして早稲田は昭和44年11月15日の対立大戦に58-11で勝ってから、昭和52年11月12日に青学大を16-11で破るまでの8年間無敗、対抗戦60連勝という、まさに日本スポーツ史における偉業を残している。

2, ジャージーについて

おなじみ「エンジと黒」の横縞のジャージーが早稲田の正式のジャージーであるが、1919年(大正8)の対三高戦で着用したジャージーは、「白とエンジ」の横縞であった。その後、現在の原形となったのが、1922年の半座敏で使用したエンジと黒の横縞で、慶応の黒黄にならったともいわれる。

3, ファーストゲーム

早稲田大学ラグビー蹴球部としてのファーストゲームは、「1919年正月、慶大と試合を行うために東上し

た三高を戸塚球場に迎え最初の試合を行った。初代主将は井上正意である。

第二章 「早稲田ラグビー」低迷期

1, なぜ低迷してしまったのか？

まずその要因の一つとして、早稲田が誇っていた戦術の優位性が消滅してしまったことである。その理由として当時にはビデオは発達しておらず、他校がそのサインプレーに対応するのに数年かかった。しかし、今では戦術の研究が進み、海外の最新情報も容易に入手できるようになってきたら、早稲田の独自性は差を詰められてしまったからである。

2, 悪しき伝統

毎日長時間の練習が当たり前となり、「早稲田のラグビーはこうなんだ。」と、形ばかりを重視した中身のない練習になり、結果的に試合で勝つための練習じゃなく形だけの練習になってしまった。

第三章 「早稲田ラグビー」復活

1, 清宮克幸監督

学生時代に日本選手権と大学選手権の両方に優勝したという得がたい経験を持ち、またトップレベルチームで得たラグビーを通し、確かな理論、指導力、選手を見抜く眼力を持っている。

2, 早稲田ラグビー革命

現在の社会人の4強を撃破するなど不可能と考えられていたが「佐々木組」でその壁を破ってみせた。そのことにより日本選手権での優勝も夢じゃないことが証明され、早稲田ラグビーは次なる挑戦に挑んでいく。

おわりに

監督が強いリーダーシップを発揮する清宮から何よりも選手達とのコミュニケーションを大切にする中竹へと変わり、与えられるラグビーから自分達で考えるラグビーへと変貌をとげた「早稲田ラグビー」こそ本来脈々と伝わってきた早稲田ラグビーの形ではないかと思う。